

# 西新町遺跡 9

—第18次調査報告—  
福岡市埋蔵文化財調査報告書第939集

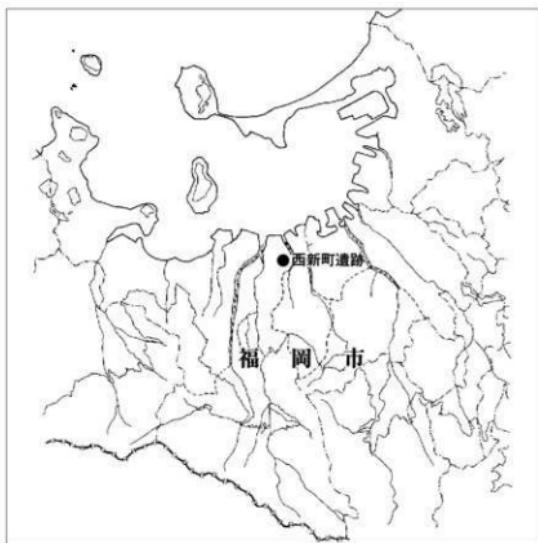


2007  
福岡市教育委員会

に し じ ん ま ち

# 西新町遺跡 9

—第18次調査報告—  
福岡市埋蔵文化財調査報告書第939集



調査番号 0543  
遺跡略号 NSJ-18

2007  
福岡市教育委員会

## 序

古くから大陸文化を受け入れる窓口として栄えてきた福岡市には、数多くの文化財が存在しています。福岡市教育委員会では、開発に伴いやむを得ず失われていく埋蔵文化財について、事前に発掘調査を実施し、記録による保存に努めているところです。

本書で報告いたします西新町遺跡では、これまでに弥生時代から中世までの生活の跡が発見されています。

今回の調査では古墳時代前期の竪穴住居が発見され、当時の生活用具である土師器の甕、壺、高环などが出土し、この地域の歴史を考える上で貴重な発見となりました。また、市内では数少ない縄文時代の生活跡も発見されました。

本書が市民の皆様の埋蔵文化財に対するご理解を深める一助となりますとともに、学術研究の分野で役立つことができれば幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査にご協力をいただきました白木恵子様をはじめとする関係各位の方々には、心から謝意を表します。

平成19年3月30日

福岡市教育委員会  
教育長 植木 とみ子

## 例　　言

1. 本書は、福岡市早良区西新5丁目572番外における共同住宅建設に伴い、福岡市教育委員会が2005（平成17）年9月21日から12月9日にかけて発掘調査を実施した西新町（にしじんまち）遺跡第18次調査の報告書である。
2. 遺構の呼称は記号化し、竪穴住居→S C、溝→S D、土坑→S K、ピット→S P、その他→S Xとした。遺構番号は種類に関係なく連番とした。
3. 本書に使用した遺構実測図は田上勇一郎が作成した。遺物実測図は森本幹彦（本市埋蔵文化財第2課）、田上が作成した。製図は田上があたった。
4. 本書に使用した写真は田上が撮影した。
5. 本書に使用した標高は海拔高である。
6. 本書に使用した方位は磁北である。本地域では真北に対し $6^{\circ}18'$ 西偏する。
7. 本書の執筆は田上が行なった。
8. 本調査にかかるすべての遺物・記録類は、福岡市埋蔵文化財センターにおいて、収蔵・公開される予定である。

## 目　　次

I	はじめ	1
1.	調査にいたる経緯	1
2.	調査の組織	1
3.	調査地点の立地と環境	2
II	調査の記録	5
1.	調査の経過と概要	5
2.	発見された遺構と遺物	10
(1)	上層遺構の調査	10
(2)	下層遺構の調査	37
(3)	縄文時代包含層の調査	39
III	まとめ	44

調査番号	0543		遺跡略号	NSJ-18	
調査地地積	早良区西新5丁目572番外		分布地図番号	荒江 72	
開発面積	542m <sup>2</sup>	調査対象面積	348m <sup>2</sup>	調査面積	348m <sup>2</sup>
調査期間	2005年（平成17年）9月21日～12月9日				

# I はじめに

## 1. 調査にいたる経緯

2005（平成17）年6月15日付けで、田代恭子氏・白木恵子氏から福岡市早良区西新5丁目572番外における共同住宅建設に伴う埋蔵文化財の事前審査願が福岡市教育委員会埋蔵文化財課に提出された。埋蔵文化財課では、申請地が西新町遺跡群の範囲内であることから、試掘調査が必要と判断した。試掘調査は同年7月19日に実施し、対象地に遺構が存在することが確認された。そこで、試掘調査の結果をふまえ、申請者と遺跡の取り扱いについて協議を重ね、建築工事によって破壊される部分を対象に本調査を実施することで合意に達した。埋蔵文化財課は氏と委託契約を結び、一部国庫補助金を受けて調査を実施した。現地での発掘調査は2005（平成17）年9月21日より12月9日まで実施した。

整理作業と報告書の刊行は2006（平成18）年度におこなった。

## 2. 調査の組織

発掘の調査・整理にあたっての組織は以下の通りである。

平成17年度

調査委託 白木恵子

調査主体 福岡市教育委員会 教育長 植木とみ子

調査総括 埋蔵文化財課 課長 山口謙治

調査庶務 文化財整備課 調査第1係長 山崎龍雄

事前協議 埋蔵文化財課 管理係 後藤泰子

事前協議 埋蔵文化財課 事前審査係長 濱石哲也

事前協議 埋蔵文化財課 事前審査係 松浦一之介

調査担当 埋蔵文化財課 調査第1係 田上勇一郎

調査作業 青木和代 青木真孝 有江笑子 上野道郎 岡部静江 海津宏子 金子由利子 指山歌子  
佐藤直利 柴田勝子 柴田春代 染井美保子 西納富士夫 三村悦子 山本キミ子

平成18年度

調査委託 有限会社グラシア

調査主体 福岡市教育委員会 教育長 植木とみ子

調査総括 埋蔵文化財第2課 課長 力武卓治

調査庶務 文化財管理課 調査第1係長 池崎謙二

事前協議 埋蔵文化財第1課 管理係 後藤泰子

事前協議 埋蔵文化財第1課 事前審査係長 濱石哲也

事前協議 埋蔵文化財第1課 事前審査係 松浦一之介・上角智希

整理担当 埋蔵文化財センター 田上勇一郎

整理作業 川田京子 山口とし子

発掘調査に至るまでの条件整備や調査中の調整などに関して、白木恵子様をはじめ関係各位の皆様には多大なご理解とご協力をいただき、調査が円滑に進行し、無事終了することができた。記して感謝する。

### 3. 調査地点の立地と環境 (Fig. 1 ~ 3)

西新町遺跡は福岡市の西部に広がる早良平野の北端、博多湾に面する砂丘上に位置する。砂丘は東を樋井川、西を金屑川に画され、東西1400m、南北300mの細長い形状を呈する。砂丘の南側は高取山（標高29m）、龜原山（標高33m）の第三紀丘陵が存在する。この砂丘上には中央の深い谷を挟んで西に藤崎遺跡、東に西新町遺跡が存在している。

藤崎遺跡は地下鉄藤崎駅周辺に広がる遺跡で、弥生時代の甕棺墓や古墳時代の方形周溝墓、土壙墓、石棺墓などの墓地遺構が多数発見され、古墳時代墓からは三角縁複波文帶盤龍鏡、三角縁二神二車馬鏡、方格鏡、渦文鏡、変形文鏡といった青銅鏡や素環頭大刀が出土している。

西新町遺跡は県立修猷館高校を中心に東西800m、南北300mに広がる弥生時代中期から古墳時代前期にかけての集落遺跡と弥生時代の甕棺墓地からなる。集落は弥生時代中期後半に遺跡南西部からみられはじめ、古墳時代初頭には修猷館高校周辺に大規模に展開する。イイダコ壺や石錘など漁村的な遺物が出土する一方で、竈の普及がはやく、朝鮮半島系の土器が多数出土するなど、当時の対外交流の拠点であったと考えられている。

調査は福岡県教育委員会が県立修猷館高校校舎建築・改築に伴い7次、福岡市教育委員会が地下鉄建設、道路拡幅、その他民間開発で14次、あわせて21次に行われている。近年修猷館高校改築に伴い大規模に発掘調査がおこなわれ、大きな成果を上げている。

今回の調査地点は遺跡の南端にあたり、砂丘と丘陵の境目に位置する。現標高5m前後で、西から東へ緩やかに傾斜している。北側には1974年、共同住宅建設中に発見された甕棺を緊急調査した1次調査地点、小兒甕棺5基、竪穴住居2軒、土坑などを検出した7次調査、甕棺32基、土器蓋土壙墓6基、竪穴住居7軒、土坑などを検出し、頭部と胴部を別々の土器に入れた人骨が出土して注目された10次調査がある。さらに北側では地下鉄工事に伴う調査（2次調査）がおこなわれている。このように西新町遺跡の中でも調査例が多い場所であり、弥生時代中期の甕棺墓と弥生時代終末から古墳時代前期の竪穴住居が分布することがわかつてき。特に甕棺墓は北西から南東へ列状に分布していることが確認された。また、西隣は本調査の翌年発掘調査がおこなわれている。（21次調査）

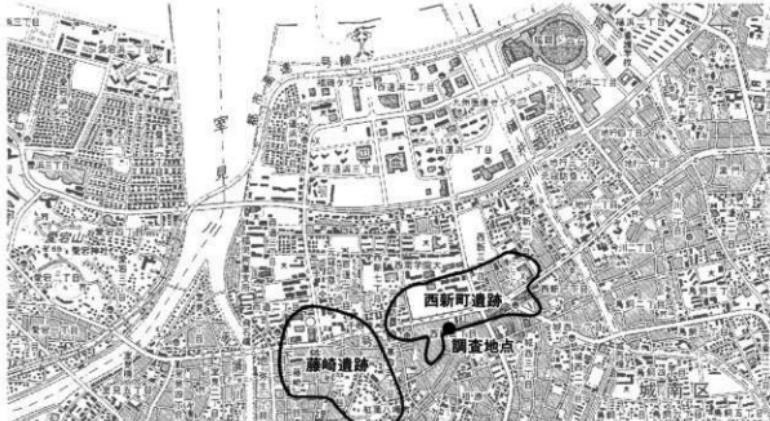


Fig. 1 西新町遺跡と調査地点の位置 (1/25,000)



Fig. 2 調査地点と周辺の調査区（1/4,000）

Tab. 1 西新町遺跡調査一覧

調査次数	調査年度	所在地	調査原因	報告書
1次調査	1974年	西新5丁目地内	共同住宅	未報告
2次調査	1976年～78年	西新6丁目地内	地下鉄	市報79集(1982)
3次調査	1984年	西新6丁目1地内	校舎建設	県報72集(1989)
4次調査	1986年	西新3丁目地内	道路拡幅	市報204集(1994)
5次調査	1992年	西新3丁目606-4	病院建設	市報375集(1996)
6次調査	1994年	西新5丁目634-4	共同住宅	市報483集(1996)
7次調査	1994年	西新5丁目638-9	共同住宅	市報483集(1996)
8次調査	1994年	西新5丁目641-1・644-2	共同住宅	市報484集(1996)
9次調査	1995年	西新5丁目564外	共同住宅	市報505集(1997)
10次調査	1995年	西新5丁目641-3外	共同住宅	市報683集(2001)
11次調査	1997年	西新5丁目632-6	店舗建設	市年報Vol.12(1999)
12次調査	1998年	西新6丁目1地内	校舎改築	県報154・157集(2000・2001)
13次調査	2000年	西新6丁目1地内	校舎改築	県報168・178集(2002・2003)
14次調査	2001年	西新6丁目1地内	校舎改築	県報200集(2005)
15次調査	2002年	西新6丁目1地内	校舎改築	県報200集(2005)
16次調査	2003年	高取1丁目105-108	共同住宅	市報846集(2005)
17次調査	2003年	西新6丁目1地内	校舎改築	県報208集(2006)
18次調査	2005年	西新5丁目572外	共同住宅	市報939集(2007) 本書
19次調査	2006年	高取1丁目111外	共同住宅	
20次調査	2006年	西新6丁目1地内	校舎改築	
21次調査	2006年	西新5丁目572-2	共同住宅	



## II 調査の記録

### 1. 調査の経過と概要 (Fig. 4 ~ 6, Ph. 1 ~ 6)

調査はシートバイルで囲まれた範囲348m<sup>2</sup>を対象とした。排土置き場の確保のため南北2分割で調査をおこなうこととし、2005（平成17）年9月21日、まず北側から着手した（A区）。現地表面から2mほど下げる汚れた黄褐色砂になり、黒色砂や茶褐色砂を覆土とする遺構が検出された。予想以上に排土が多く、全体の約3分の1程度の面積しか調査ができなかった。また、この面で確認できなかつた遺構があったため、さらに20cmほど下げ、きれいな黄色砂を出して新たに遺構検出を行つた。細い溝が数条と新たなピットが検出されたが遺物はほとんど出土しなかつた。10月17日に調査を終了し、翌日より南西側の調査を開始した（B区）。A区同様2面の調査を行つたが、竪穴住居の床面以下から土器や黒曜石が出土したため、黄褐色砂を除去し、以下の層を調査したところ、縄文時代前期の包含層が存在することがわかつた。11月9日にB区を終了し、翌日撤収し、現地での全調査を終了した。

検出した遺構は竪穴住居3軒、溝7条、土坑22基、ピット多数である。遺物は古墳時代初頭の古式土師器を中心に、弥生時代甕棺、古墳時代後期須恵器、中世の土師器壺や備前焼甕、縄文時代前期縄B式、曾畠系土器、石鎚、スクレイバー、磨石、石皿、黒曜石剝片等が出土している。

遺構の実測は敷地の方向に合わせて組んだ2m方眼で行った。位置は東西方向にアルファベット、南北方向に数字を付けて表した。

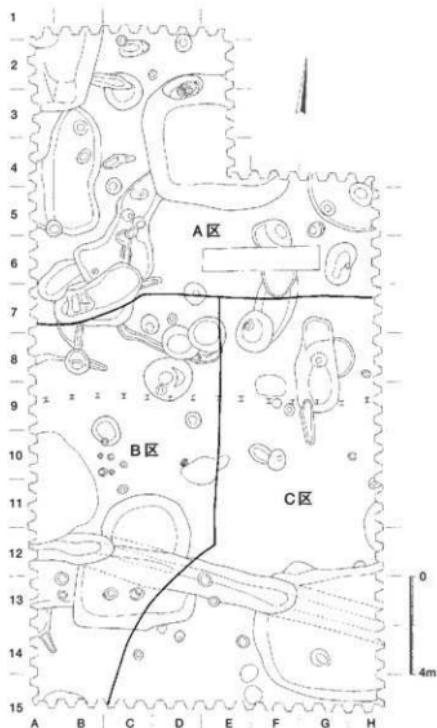


Fig. 4 調査区割図 (1/200)

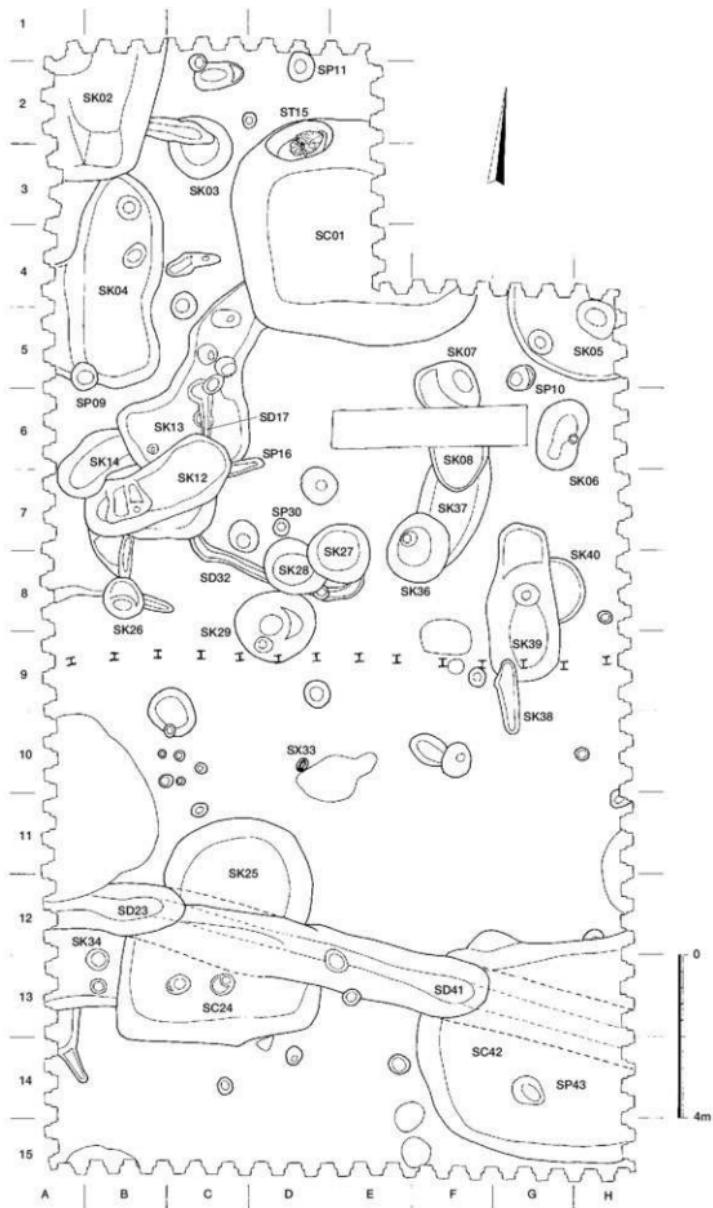


Fig. 5 上層構造分布図 (1/120)



Ph. 1 (上)

A区上層全景（南から）

Ph. 2 (中)

B区上層全景（北から）

Ph. 3 (下)

C区上層全景（北から）

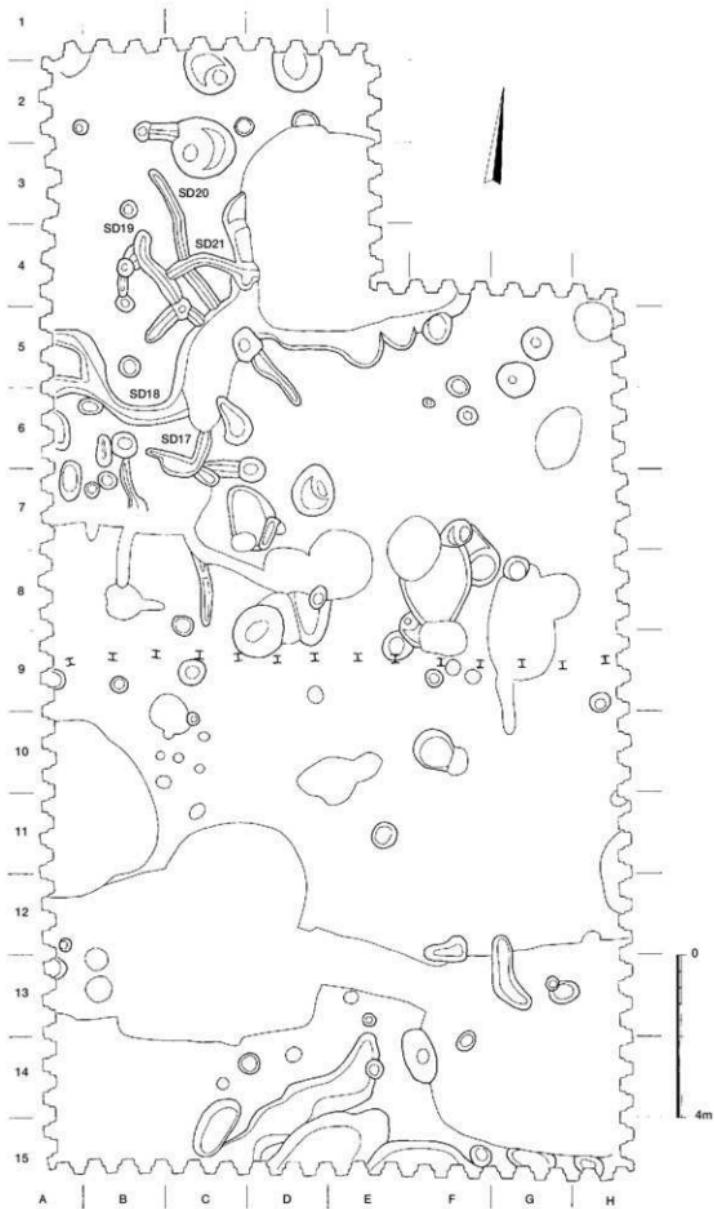


Fig. 6 下層構造分布図 (1/120)



Ph. 4 (上)

A区下層全景（南から）

Ph. 5 (中)

B区下層全景（北から）

Ph. 6 (下)

C区下層全景（北から）

## 2. 発見された遺構と遺物

### (1) 上層遺構の調査

竪穴住居

#### S C 0 1 (Fig. 7・8、Ph. 7~10)

A区で発見された古墳時代前期の方形竪穴住居である。北東部は調査区外にのびる。平面形は東西6.0m、南北5.5mの長方形を呈し、残存壁高90cmの竪穴住居である。しかし、土層断面、遺物出土状況や北壁に甕棺が露出したことから、汚染された砂層を掘っているようである。土層図6~8が掘り過ぎと思われる所以、住居規模は南北3.8m、残存壁高は80cmと推定される。柱穴は発見されなかったが、床面のレベルで湧水があり、幾分確認に不安が残る。遺物は北西部と南西部に集中部がある。

Fig. 8 に出土遺物を示す。

1は在来系の直口壺である。南西部で出土した。口縁は内傾する。外面胴部上半はタテハケ、内面は斜め方向のハケ調整を施す。口縁部は内外面ともヨコナデ。口径11.6cm、器高31.3cm、胴部最大径27.5cm。色調は淡黄白色で、胎土に1mm程度の砂粒を含む。焼成は良好で、全体の2分の1が残存する。2は在来系の二重口縁の壺。北西部でまとめて出土した。大きく開いた長い口縁の外面中程に三角突帯があり、その上部には斜め方向のハケ、下部には鋸歯文風のハケを施す。内面は上部がヨコナデ、下部がハケ調整である。胴部は内外面ともハケ調整。頸部に三角突帯がある。口径23.6cm、橙白色を呈し、胎土に径1mm程度の砂粒を含む。焼成は良好。胴部下半は欠損する。3~6は在来系の高壺である。3は南西部で

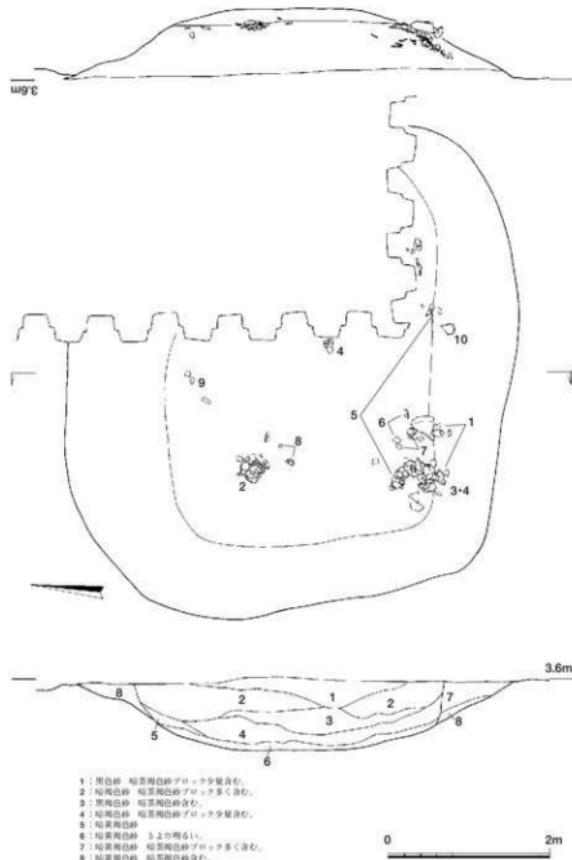


Fig. 7 S C 0 1 実測図 (1/60)

出土した。坏部外面ナデ調整の後鋸歯文風の暗文を施す。内面はハケの後、ミガキ。脚部は外面ミガキ、内面ハケ調整。口径31.4cm、脚部径16.0cm。坏部が傾いており、器高は20.1~22.0cm。黄褐色を呈する。胎土は精良で微細な砂粒をごく少量含む。焼成は良好である。**4**は南西部と中央部で出土した。器面が荒れており、調整の残りが悪いが、坏部内底はハケ後ミガキ、坏内面上部から外面はミガキ、脚部内面はミガキ調整。脚部に円形の穿孔が2ヶ所あるが180度対面の位置に配されていない。口径32.8cm、脚部径16.0cm、器高20.3~20.7cm。色調は黄褐色で、胎土は精良、非常に細かい石英、長石をごくわずかに含む。焼成は良好である。**5**は南西部と中央南壁際で出土した高坏の坏部。外面上部は口縁部ヨコナデ、その下はハケ調整の後、鋸歯状の暗文を施す。下部はヘラケズリ。内面はやや斜めの放射状のヘラミガキが密に施される。坏部3分の1が残存しており、復元口径31.4cmである。色調は赤橙色で、胎土精良、径1mm以下の砂粒をごくわずかに含む。焼成は良好である。**6**は南西部で出土した高坏の脚部である。外面はハケ調整の後、ミガキを施す。内面はハケ調整。脚部の3分の1残存しており、復元脚部径17.0cmである。淡黄褐色を呈し、胎土は精良で、径2mm以下の砂粒を含



Ph. 7 S C 0 1 (西から)



Ph. 8 S C 0 1 遺物出土状況 (北西から)



Ph. 9 S C 0 1 遺物出土状況 (西から)

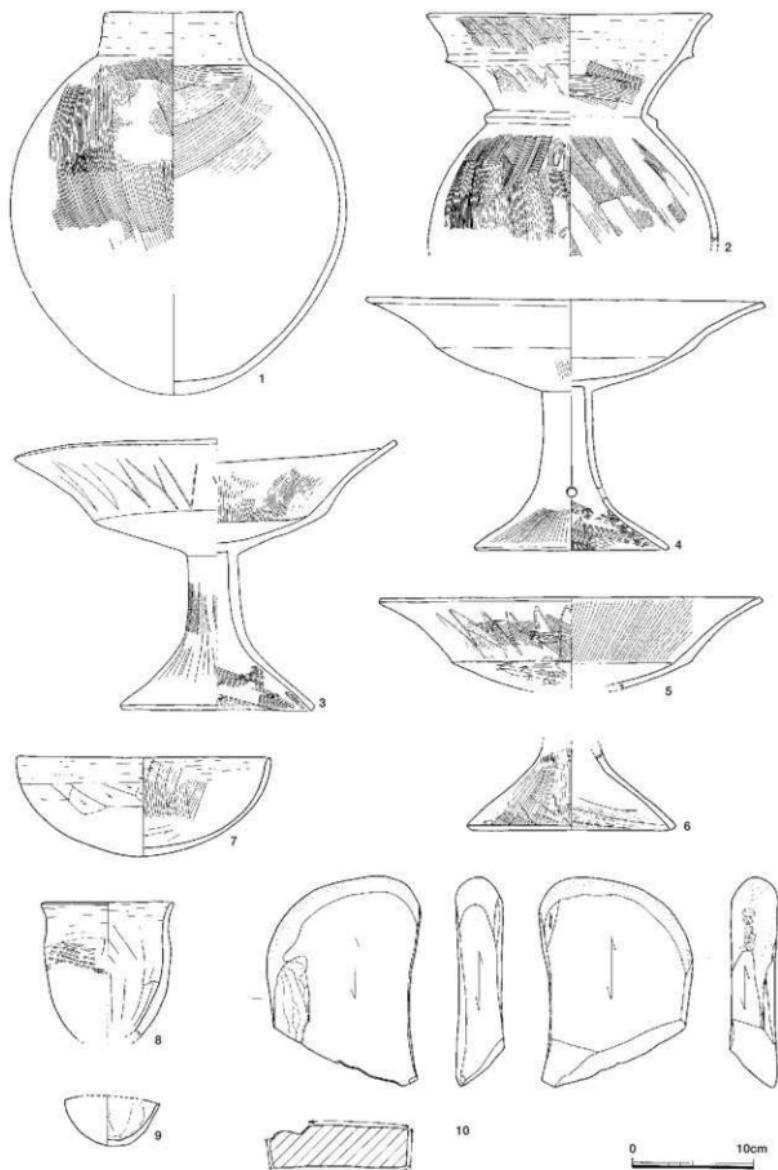


Fig. 8 S C 01 出土遺物実測図 (1/4)

む。焼成は良好。5と6は同一個体か。7は南西部で出土した丸底の鉢。外面上部はケズリ、下部はナデ調整。内面上部はハケ、下部は不定方向のナデを施す。口縁部は内外面ともヨコナデ。口径20.8cm、器高8.2cm。胎土は赤褐色で胎土に径1mm前後の砂粒を多く含む。焼成は良好である。8は北西部で出土した小型の甕である。外面はタタキの後、ハケ、内面はケズリ。口縁部は内外面ともヨコナデ。全体の3分の1程度残存し、復元口径11.0cm、残存高11.0cmである。内面は黒褐色、外面は赤褐色を呈し、胎土に径1mm程度の砂粒を多く含む。9は中央北壁際で出土したてづくねの椀。歪んで



Ph.10 S C O 1 出土遺物 (9:約1/2・他:約1/4)

おり、口径6.8~7.8cm、器高3.5~4.1cm。赤橙色を呈し、胎土に径1mm程度の砂粒を含む。口縁部の一部を欠損する。**10**は中央南壁際で出土した砥石である。細粒砂岩製で4面使用している。

#### S C 2 4 (Fig.9・10, Ph.11-14)

B区・C区にまたがって検出された古墳時代前期の竪穴住居である。SD 23・41が東西に横断して切っているが、調査時には一部しか確認できなかった。東西4.9m、南北3.4mの東西に長い方形竪穴住居である。B区の調査時に覆土を掘り下げていくと赤褐色の砂層に当たり、当初は床面全面が焼けていると考えた。この砂層からも土器が出土するためさらに掘り下げたが、住居の壁の外までこの層が広がることから遺物包含層であると判断された。そのため、B区では20cm床面を掘りすぎている。土層断面やC区の調査から、残存壁高は50cmである。主柱穴と考えられるピットがやや西に偏って2ヶ所確認された。深さは床面から約30cmと浅い。遺物は小破片であるが北西部でまとまって出土した。

Fig.10に出土遺物を示す。**11**は畿内伝統的V様式系の甕である。北西部から出土した。一部破片がSK12より出土している。凸レンズ状の底部を持つ。口縁部はヨコナデ、胴部はハケ調整を丁寧に施す。内面胴部上端はケズリにより頸部に棱を作る。口径17.8cm、器高25.3~26.6cm、底径4.2cm。暗黄褐色を呈し、胎土に径1mm程度の砂粒を含む。約9割程度残存している。焼成良好で、表面はつるつるしている。**12**は布留系の甕である。北西部から出土した。口縁部はヨコナデ、外面は頸部タテハケ、胴部ヨコハケ、胴部内面はケズリを施す。口縁周囲約2割残存しており、復元口径は15.4cm。暗褐色~淡褐色を呈し、胎土に径1mm程度の砂粒、角閃石を含む。器面の摩滅著しい。**13**は東部で

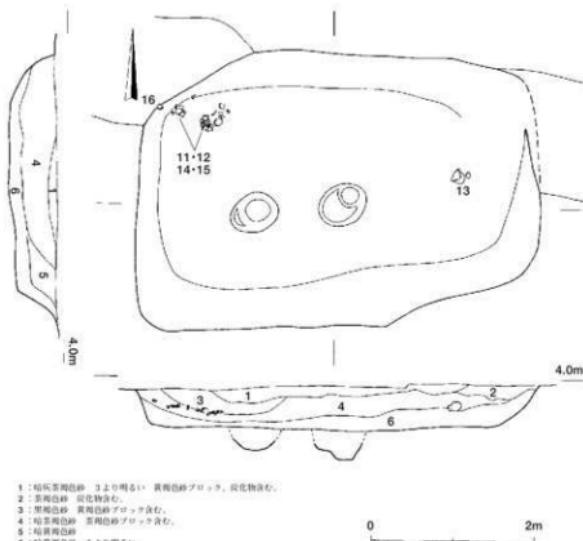


Fig. 9 S C 2 4 実測図 (1/60)

出土した小型の甕である。胴部下半に焼成時破裂痕がある。調整は粗いハケであるが、内面に一部細かいハケが認められる。橙色を呈し、胎土に径1mm程度の砂粒を含む。口縁部の4分の1を欠損する。口径15.3cm、器高12.6cm。**14**は鉢である。北西部から出土した。一部破片がSK12より出土している。口縁端部が直立気味に折れる。調整は口縁部ヨコナデ、内面ハケ、外面ケズリである。全体の3分の1程度残存しており、残存口径17.6cm、残存高4.5cmである。赤橙色を呈し、胎土に径1mm程度の砂粒を含む。**15**は北西部から出土した高环の脚部である。外面は縱方向のケズリの後、部分的に横方向のミガキ、ケズリを施す。内面は目の粗いハケ調整を施す。脚柱はほぼ完存するが、脚端は10分の1未満残存。復元脚部径10.6cm、残存高6.8cm。暗褐色を呈し、径1mm前後の砂粒少量、雲母、角閃石含む。**16**はてづくね土器の椀である。北西部から出土した。口径6.8cm、器高2.6cm。赤橙色を呈し、胎土に径1~2mmの砂粒を含む。口縁部を8分の1欠損する。



Ph.11 B区SC24（南から）



Ph.12 C区SC24（北から）



Ph.13 SC24 遺物出土状況（南から）

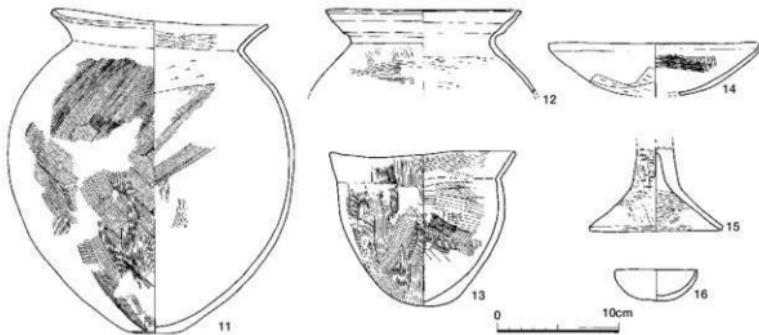


Fig.10 S C 2 4 出土遺物実測図 (1/4)



Ph.14 S C 2 4 出土遺物 (16:約1/2・他:約1/4)

#### S C 2 4 (Fig.11・12, Ph.15~18)

C区で検出した古墳時代前期の方形竪穴住居である。S D 4 1が横断するが、調査時にプランが一部しか確認できなかった。土層観察でも確認できなかつたが、須恵器片(32)が出土したため、溝が続いていたと考えられる。東側は調査区外にのび、確認できた東西規模は5.3m、南北は5.0m、残存壁高は60cmである。やや南に10cm程度の凹み(S P 4 3)がある。

Fig.12に出上遺物を示す。17・18は在来系の長胴甕。17は南部に散乱して出土している。胴部外面上半はタタキ、ヨコナデの後タテハケ、下半はタタキの後、縦方向のカキナデ。内面はナデで、口縁部との境はケズリにより、頸部内面の稜線を作り出す。口径23.6cm、残存高31.5cm。赤褐色を呈し、胎土に径1~2mmの砂粒含む。18は中央西寄りで出土した。胴部外面上部はタテハケ、下部はハケ

の後縦方向のケズリ。内面は平滑なナデ調整。口縁部は内外面ともハケ調整の後ヨコナデ。口径18.7cm、器高29.9cm。橙色を呈し、径1～3mmの砂粒を含む。全体の8割残存。19は布留系の甕。口縁端部は凹み気味の外傾面をなす。口縁部はヨコナデ、胴部外面はタテハケの後、ヨコハケ、内面は横向方向のケズリを施す。淡褐色を呈し、胎土に径1mm程度の砂粒を多く含む。口縁周り5割程度の破片があるが、あまり接合しない。復元口径16.5cm。20は畿内伝統的V様式甕の底部。南部で出土している。底部は輪台による弱い突出底。外面は左上がりの太筋のタタキのち、縦方向のナデ、内面はハケ調整。淡黄褐色～橙色を呈する。胎土に径1～3mmの砂粒を多く含む。21・22は山陰系の壺。同一個体の可能性がある。21は南西部で出土。口縁部ヨコナデ、頸部外面はタテハケの後ヨコナデ、内面

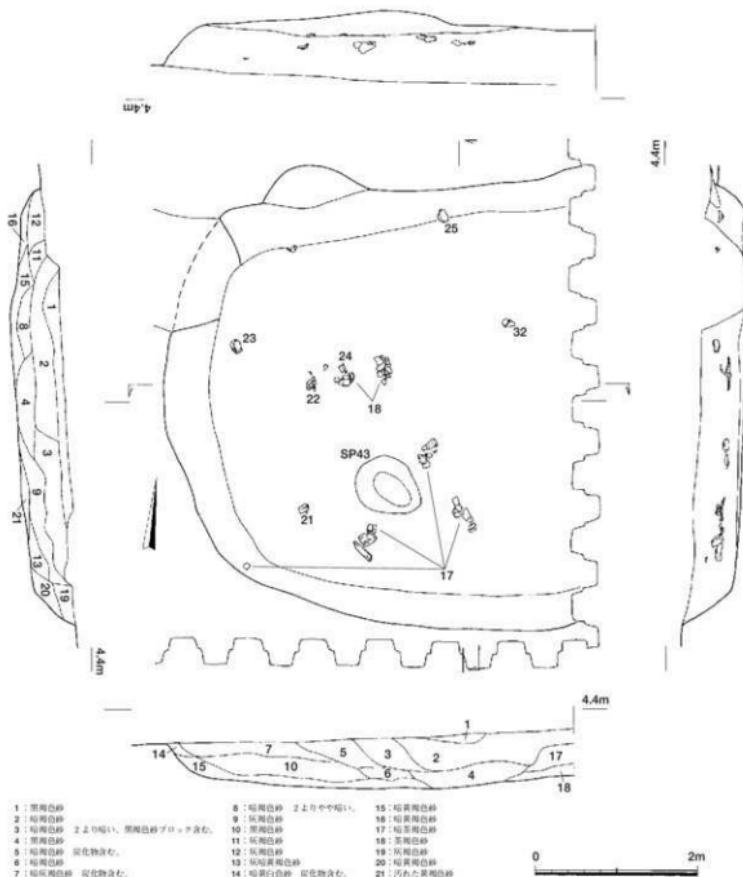


Fig.11 SC 42 実測図 (1/60)

はミガキ。淡褐色を呈し、胎土に径1～3mmの砂粒を含む。口縁～頸部の8割程度残存し、復元口径は18cm。**22**は中央西寄りで出土した。肩部にハケ工具による平行黄線文と押引状の列点文を施す。調整は外面ヨコハケ、内面ケズリ。胴部の3割程度残存。褐色を呈し、胎土に径1～2mm程度の砂粒を多量含む。**23**は西部で出土した小型の甕。器面調整は外面上部タテハケ、下部ハケの後ケズリ。内面上部ハケ、下部綫方向のナデ、内底ハケである。口径11.6cm、器高13.2cm。橙色を呈し、胎土に径1～3mmの砂粒を多く含む。**24**は中央西寄りで出土した在来系の小型短頸壺である。外面上部はタテハケの後、弱いヨコナデ、下部は横方向のカキナデ、内面は口縁部ハケ、頸部ヨコナデ、胴部ハケ調整。復元口径12.2cm、残存高9.9cm。外面淡黄褐色、内面黒灰色を呈し、胎土に径1～2mmの砂粒を多く含む。**25**は伝統的V様式系の丸底の短頸壺である。北壁際中央で出土した。口縁外面はタテハケの後ヨコナデし、粗い波状の暗文を施す。胴部外面上位はハケの後ヘラミガキ、下位はケズリの



Ph.15 SC 4 2 (北から)



Ph.16 SC 4 2 遺物出土状況 (北東から)



Ph.17 SC 4 2 遺物出土状況 (東から)

後ヘラミガキ。口縁部内面はハケの後ヨコナデ、胴部内面はハケの後ナデ、内底はハケ調整である。口径12.5cm、残存高15.6cm。黄褐色～淡赤褐色を呈し、胎土に径1mm程度の砂粒を含む。26は小型の精製器種B群の鉢である。東部で出土した。外面はタテハケの後、細かい横方向のミガキ、内面は横方向の細かいミガキ。口縁周り約3割残存し、復元口径12.0cm、残存高4.2cm。明褐色を呈し、胎土に径1mm程度の砂粒を多く含む。27は小型の鉢。口縁周り10分の1程度の残存のため、傾き、径に不安

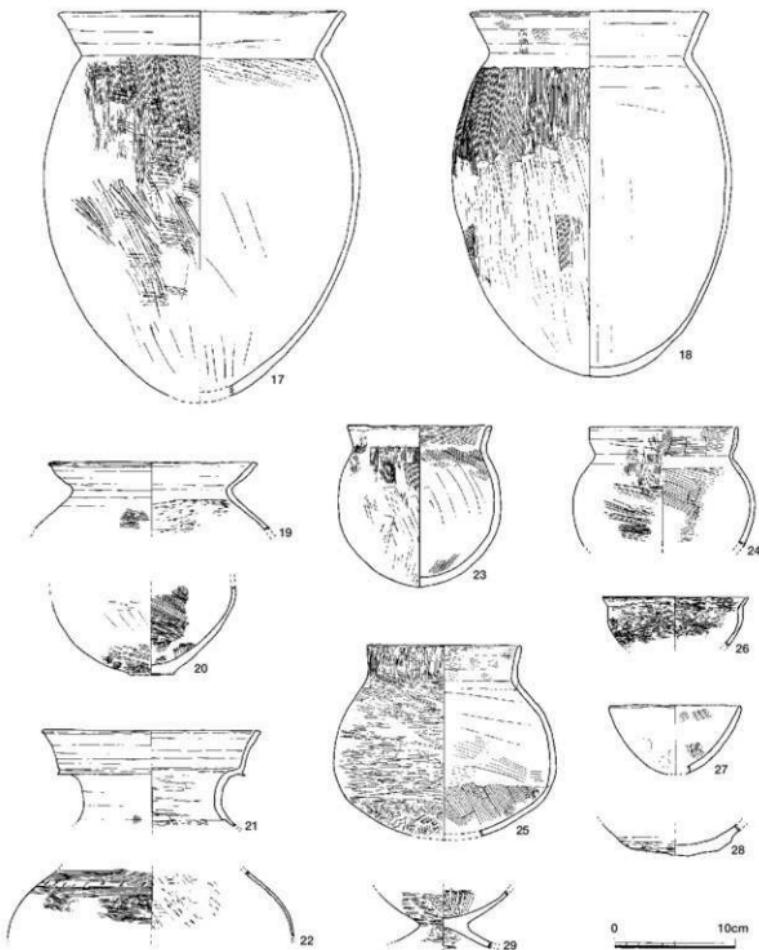
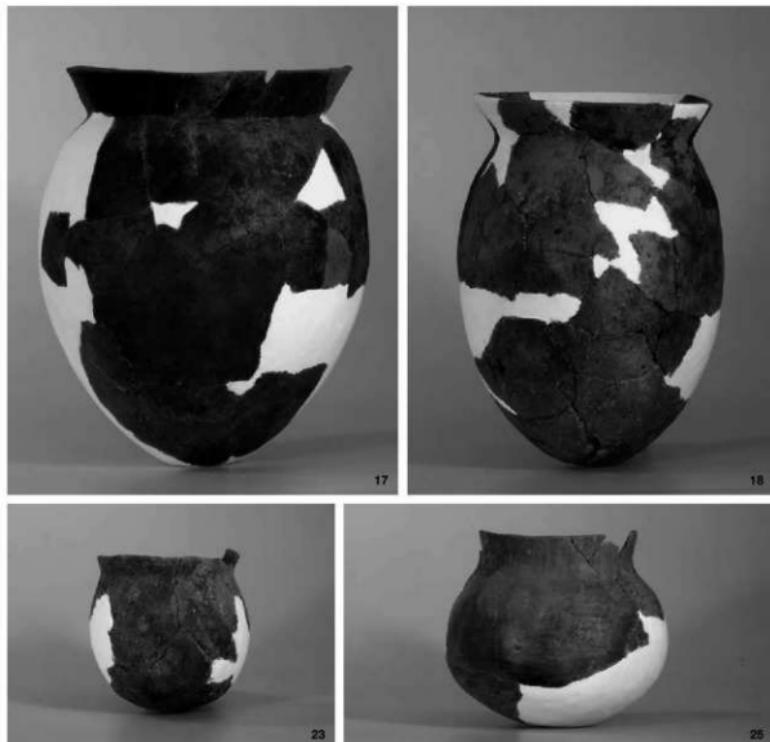


Fig.12 S C 4 2 出土遺物実測図 (1/4)

が残るが、復元口径10.5cm、残存高5.6cmである。外面はナデ調整で、指押さえの痕跡が残る。内面はハケ調整。赤褐色を呈し、胎土に径1mm程度の砂粒を少量含む。**28**は南西部で出土した鉢の底部である。外底はケズリ。淡褐色を呈し、胎土に径1～3mmの砂粒を含む。**29**は南部で出土した小型の精製器種B群の脚付鉢である。外面はタテハケの後細かい横方向のヘラミガキ、鉢部内面細かい横方向のヘラミガキの後、縦方向の太いミガキ、脚部内面ケズリの後、横方向の細かいミガキ。淡褐色～淡橙色を呈し、胎土に径1～2mmの砂粒を含む。**26**と調整、胎土が類似している。



Ph.18 S C 4.2 出土遺物（約1/4）

溝

**S D 2 3 • 4 1 (Fig.13・14, Ph.19・20)**

S D 2 3 は B 区の調査時に S C 2 4 の北西隅と S K 2 5 の西を若干切るプランで調査を行った。幅 1.3m、深さ 40cm の東西方向の溝で西側は調査区外にのび、長さ 3.4m 分確認した。断面は浅い U 字状である。須恵器の小片が出土したため、切り合いも間違いはなかった。しかし C 区の調査で、S C

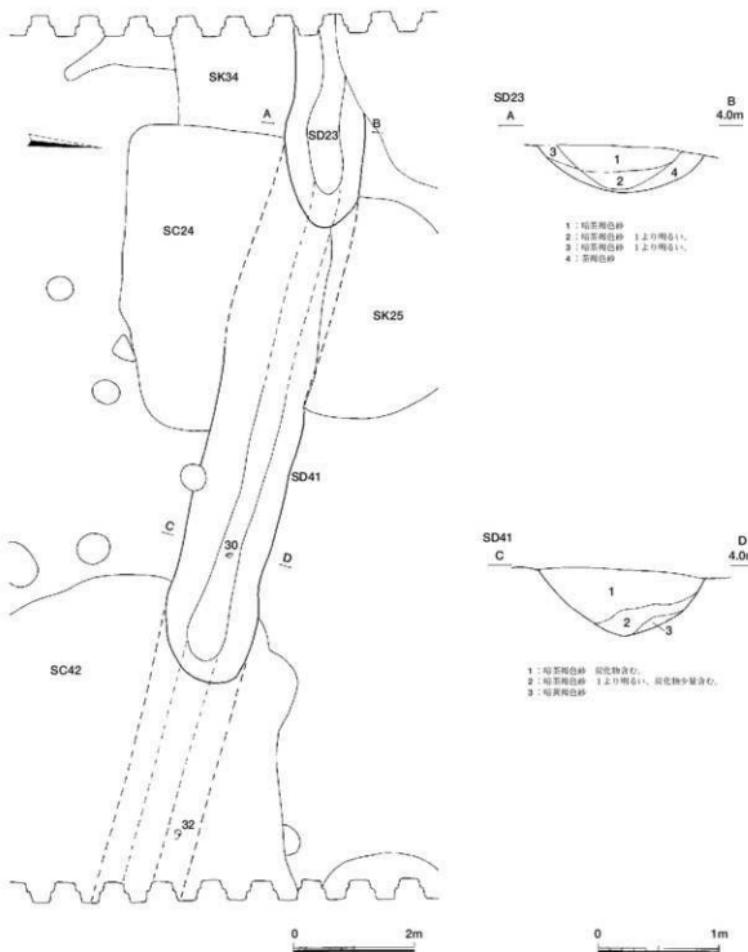


Fig.13 SD 2 3 • 4 1 実測図 (1/80・1/40)



Ph.19 SD 2 3 (北東から)



Ph.20 SD 4 1 (西から)

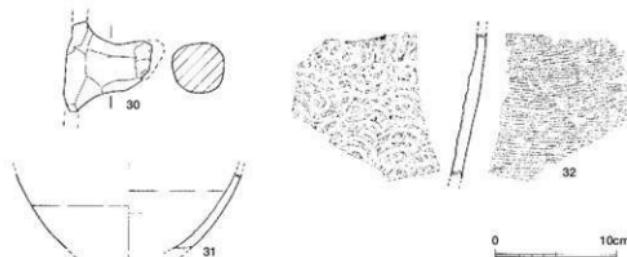


Fig.14 SD 4 1出土遺物実測図 (1/4)

24より東に溝が存在することが分かり、SD 2 3の延長かと思われた。これをSD 4 1としてプランの確認をおこなったところ、SC 4 2の一部にかかって途切れるように検出された。長さはC区の西際から5.4m、幅は1.4m、深さは50cm前後であった。しかしながら、古墳時代前期の竪穴住居SC 4 2を掘削中に須恵器片が出土し、溝はさらにのびていたことが判明した。結局SD 2 3とSD 4 1は一連の東西方向の溝で、両端は調査区外にのびていることが分かった。

出土遺物をFig.14に示す。30は土師器の瓶把手である。淡褐色を呈し、胎土に径2mm程度の砂粒を含む。31は須恵器の壺である。胴部下半の破片で、傾きには不安がある。内面は上部が回転ナデ、下部が不定方向のナデ。灰色を呈し、胎土に径1mm程度の砂粒を含む。焼成は良好。32は須恵器の甕である。外面はタクキ、内面は同心円文の当て具痕。灰色～暗赤色を呈し、胎土に径1～3mmの砂粒を含む。

出土遺物より奈良時代の溝と考えられる。

## 土坑

### SK 02 (Fig.15, Ph.21)

A区で調査をおこなった。A・B-1~3に位置する土坑である。調査区北西隅であり大半が調査区外である。東西3.1m、南北3.5mが調査された。深さは50cm程度である。土師器片が少量出土した。

### SK 03 (Fig.16)

A区で調査をおこなった。C-2・3に位置する円形土坑である。径1.5m、深さ20cmである。土師器片がごくわずか出土した。

### SK 04 (Fig.17・18, Ph.22・23)

A区で調査をおこなった。A・B-3~5に位置する土坑である。東西2.3m、南北5.3m、深さ20~30cmの楕円形で、南側では西に広がる。南寄りで33の在来系の甕が平面的に広がって出土した。頭部と胴部下部に突帯がめぐる。突帯にはハケメ工具で刻みを入れる。外面口縁部はハケの後ヨコナデ、胴部の上部はハケ、下部はカキナデ、内面はハケ調整で、底部はナデ調整を施す。褐色~橙色を呈し、胎土に径3mm程度の砂粒多く含む。破片の接点が少なく、径、傾きに不安があるが、口径37.6cm、

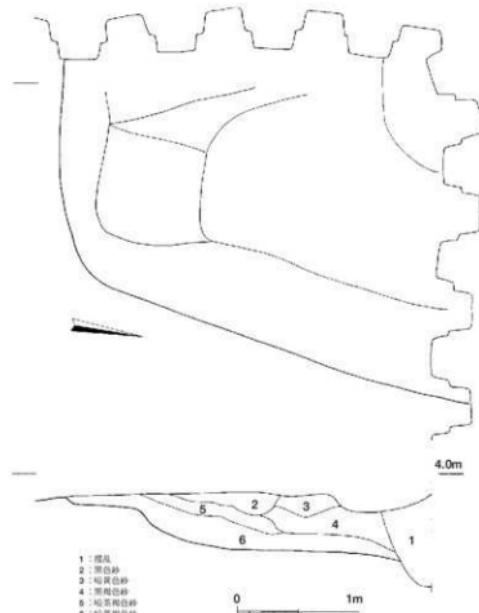


Fig.15 SK 02 実測図 (1/40)



Ph.21 SK 02 (東から)

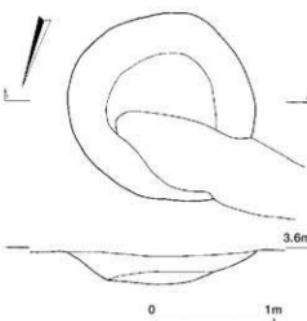


Fig.16 SK 03 実測図 (1/40)

器高38.8cmに図上復元した。そのほか、弥生時代中期の甕底部が出土している。

#### SK 05 (Fig.19, Ph.24)

A区で調査をおこなった。G・H-4・5に位置する土坑である。調査区北東端であり、大半が調査区外にのびる。径4.5m程の円形土坑であろうか。調査区内の規模は東西2.9m、南北2.4m、深さ20cm。ピットがあるがこの土坑に伴うものか不明。遺物は出土しなかった。

#### SK 06 (Fig.20・21, Ph.25・26)

A区で調査をおこなった。G・H-6に位置する土坑である。東西1.1m、南北1.8m、深さ80cm。須恵器の壺が最上部から出土した。34は九州編年IV期の須恵器壺身。底部は回転ヘラケズリを施す。灰色を呈し、胎土に径1~2mmの砂粒を多く含む。焼成は良好である。3分の1程度残存しており、復元口径11.8cm、受け部径14.6cm、器高4.1cm。

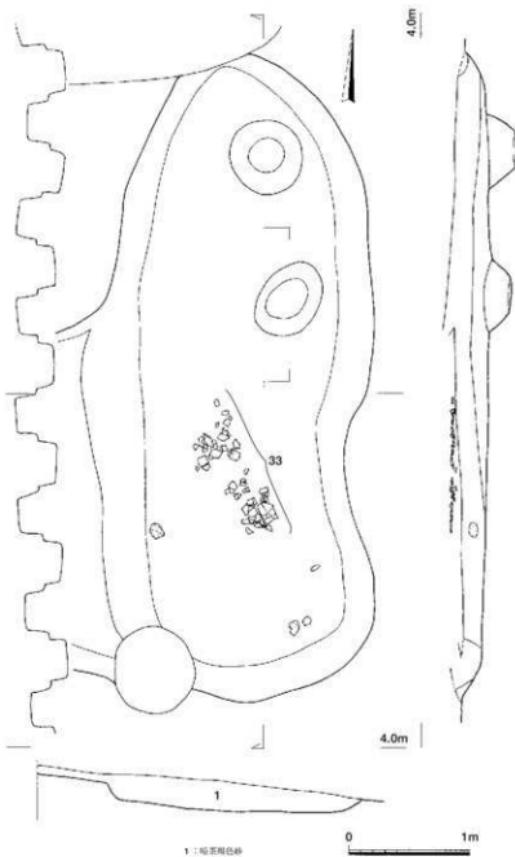


Fig.17 SK 04 実測図 (1/40)



Ph.22 SK 04 (南東から)



Ph.23 SK 04 遺物出土状況 (南東から)

**SK 07 (Fig.22)**

A区で調査をおこなった。F-5・6に位置する土坑である。南側をトレンチに切られる。東西1.5m、南北1.3m残存。深さは深いところで25cm。遺物は出土しなかった。

**SK 08 (Fig.23)**

A区で調査をおこなった。F-6・7に位置する土坑である。北側をトレンチに切られる。SK 3-7を切る。東西1.5m、南北1.1m残存。深さは20cm。土師器片が少量出土した。

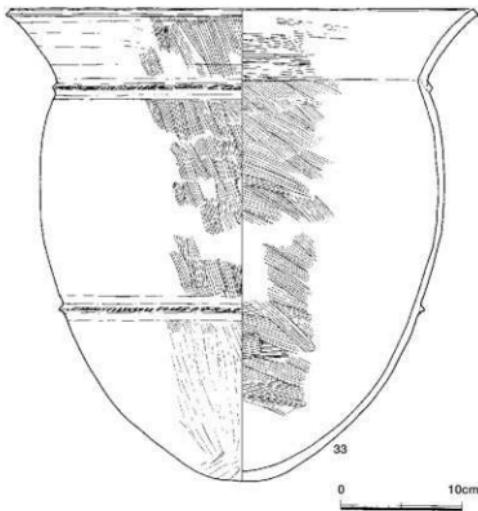


Fig.18 SK 04出土遺物実測図 (1/4)

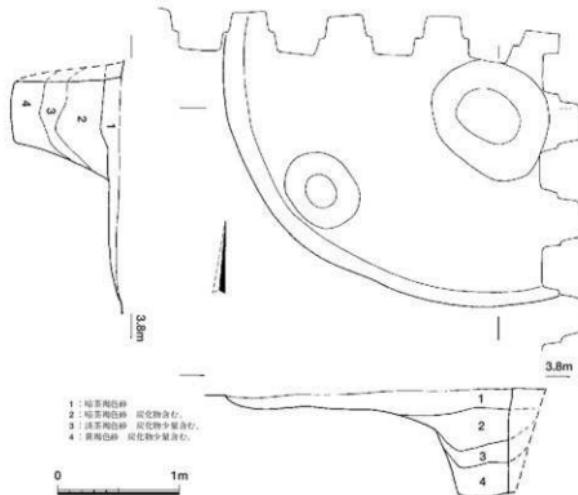


Fig.19 SK 05実測図 (1/40)

SK 12 (Fig.24・25, Ph.27~29)

A区で調査をおこなった。B・C-6・7に位置する土坑である。東西3.9m、南北1.3~1.7mの梢円形を呈する。深さは平均30cmで、深いところで50cmある。SK 14に切られ、SK 13を切る。遺物は東側に集中して出土した。平面プランから飛び出した遺物があり、掘り足りていなかったようである。35は在来系の甕。口縁外面タテハケの後ヨコナデ、内面はヨコハケの後ヨコナデ。胴部外面上半はタテハケ。ななめ左上方向の1次ハケ、タタキの痕跡が認められる。口径22.7cm、器高36.5cm淡褐色~赤褐色を呈し、胎土に径1~3mmの砂粒を多く含む。全体の8割残存。36は在来系の甕。頸部に小さな三角突帯、胴部下半にX印を刻む突帯がめぐる。口縁部はハケ、胴部外面はタタキの後、ハケ、突帯より下はカキナデ、内面はハケ調整を施す。口径29.9cm、残存高39.1cm。淡橙白色を呈し、胎土に径1~2mmの砂粒を多く含む。口縁部から胴部の8分の1と底部を欠損する。37は在来系の直口壺である。一部SC 01から出



Ph.24 SK 05 (南西から)

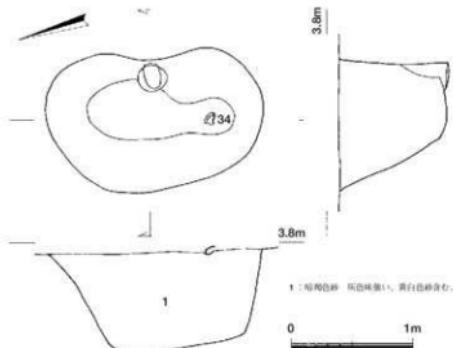


Fig.20 SK 06 実測図 (1/40)

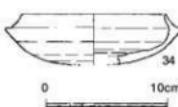
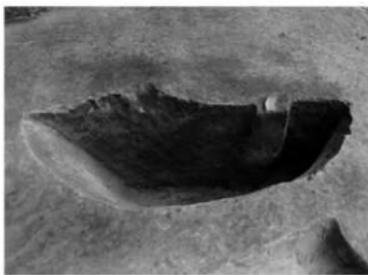


Fig.21 SK 06 出土遺物実測図 (1/4)



Ph.25 SK 06 遺物出土状況 (西から)



Ph.26 SK 06 (西から)

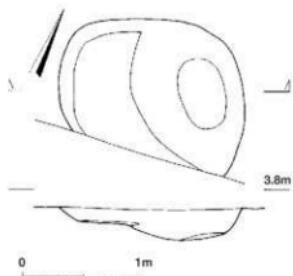


Fig.22 SK 07 実測図 (1/40)

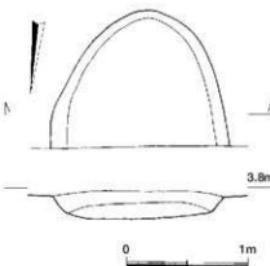


Fig.23 SK 08 実測図 (1/40)

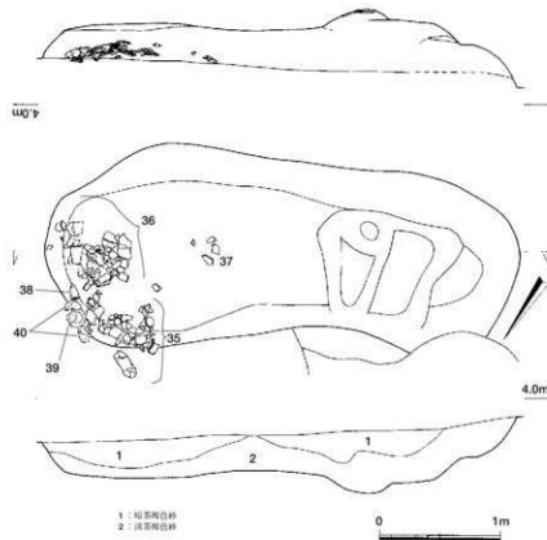


Fig.24 SK 12 実測図 (1/40)



Ph.27 SK 12 (東から)



Ph.28 SK 12 遺物出土状況 (南から)

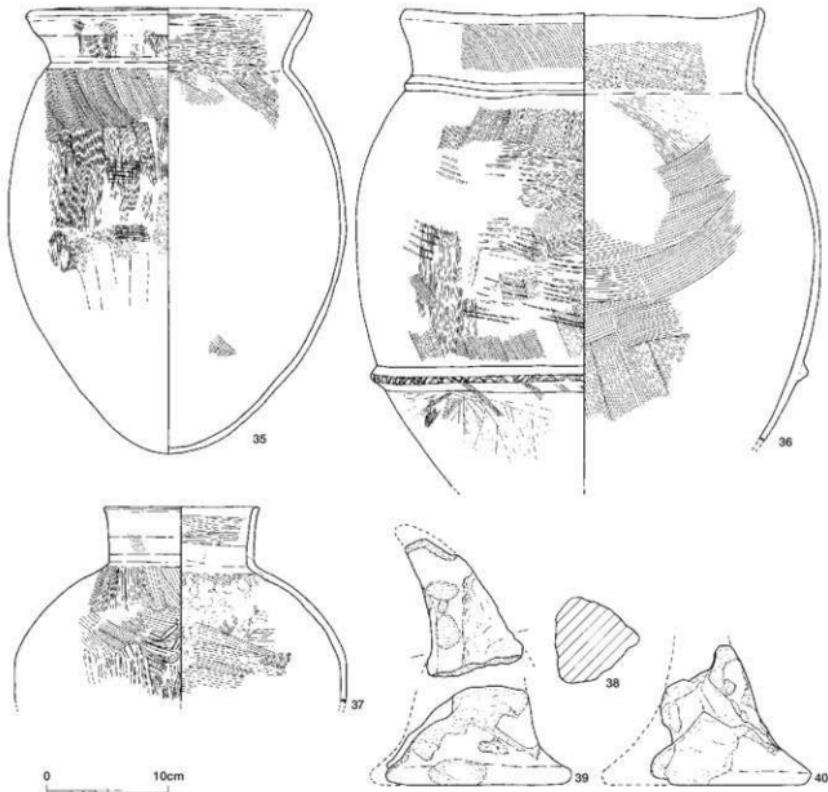


Fig.25 SK 1 2 出土遺物実測図 (1/4)

土している。口縁部外面はハケの後ヨコナデ、内面は目の粗いヨコハケ。胴部外面上部は目粗いハケ、下部はハケの後カキナデ。胴部内面はななめ左上方向の目が粗い1次ハケの後、ななめ右上方向の目の細かい2次ハケを施す。淡褐色～橙色を呈し、胎土に径1～3mmの砂粒を多く含む。38～40は角状支脚である。いずれも表面が剥落している。暗灰褐色を呈し、胎土に径1～2mmの砂粒を多く含む。38と39は同一個体か。

#### SK 1 3 (Fig.26)

A区で調査をおこなった。B～D-4～6に位置する不整形の土坑である。SC 0 1に切られる。調査時のプラン確認でSK 1 2に切られ、SK 1 4を切るとしていたが、SK 1 2はSK 1 4に切られているため、切り合いで矛盾が生じていた。土層断面を見ると西側の1層はSK 1 4の覆土であつ



Ph.29 SK 1 2 出土遺物 (約1/6)

た可能性があり、そうするとSK 1 3が一番古く、SK 1 4が一番新しいということになる。底面からピットや溝(S D 1 7)が検出されたが、土坑とは伴わないであろう。深さは30~40cm。土師器片が少量出土した。

#### SK 1 4 (Fig.27)

A区で調査をおこなった。A・B-6・7に位置する土坑である。SK 1 2を切る。前述したようにSK 1 3を切り、SK 1 3の1層がSK 1 4の覆土であるとすると長軸2.9mとなる。短軸は1.1m、深さ40cm。土師器片が少量出土した。

#### SK 2 5 (Fig.28, Ph.30)

B区で調査をおこなった。B~D-11・12に位置する。径3.6m程の円形土坑であろう。深さは70cm。土層観察ではSC 2 4に切られているようになっているが、実際はSD 2 3・4 1が間にあり、新旧関係は明らかでない。規模は大きいが土師器片が少量出土したのみである。

#### SK 2 6 (Fig.29)

B区で調査をおこなった。B-8に位置する径1.0mの円形土坑である。南側が深く40cm、北側は15cm。土師器小片が1点出土したのみである。

#### SK 2 7 (Fig.30・31, Ph.31~33)

B区で調査をおこなった。D・E-7・8に位置する径1.5mの円形土坑である。深さは40cm。SK 2 8を切る。中央で中世の土師器の壊が、南側で古墳時代前期の土師器が出土しており、中世の遺構のプランを確認できていなかったようである。**41**は中世の土師器壊である。口径13.8cm、底径7.9cm、器高3.0~3.2cm。底部は回転糸切りである。赤褐色を呈し、胎土は精良。焼成良好である。口径部4分の1欠損する。**42**は在来系の甕である。外面は上部タテハケ、下部は縦方向のカキナデ、内

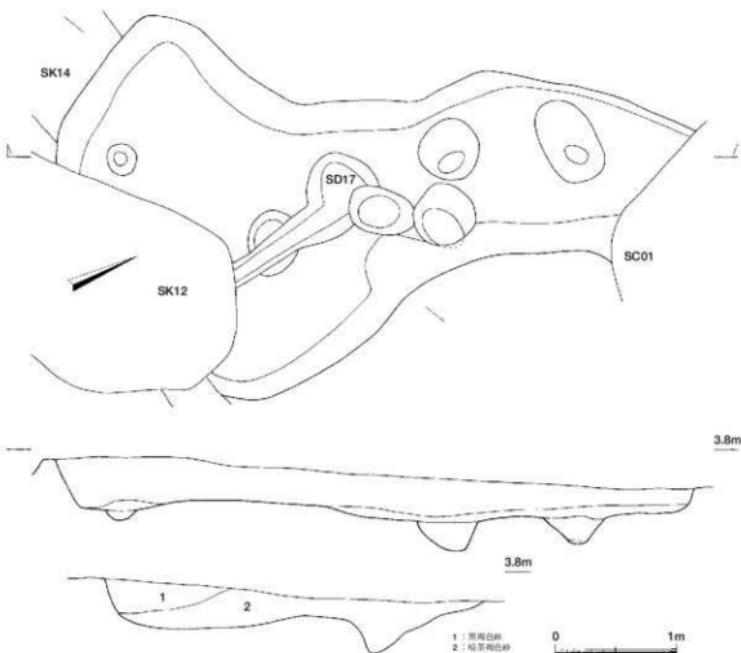


Fig.26 SK 13実測図 (1/40)

面はハケ調整。淡橙白色を呈し、胎土に径1mm程度の砂粒を含む。ススが付着している。胴部4分の1欠損。

#### SK 2 8 (Fig.32, Ph.33)

B区で調査をおこなった。D-7・8に位置する東西1.6m、南北1.3m、深さ30cmの楕円形土坑である。SK 2 7に切られ、SK 2 9を切る。土師器片がごくわずか出土した。

#### SK 2 9 (Fig.33, Ph.33)

B区で調査をおこなった。C・D-8・9に位置する楕円形土坑である。SK 2 8に切られる。東西2.0m、南北1.8m、深さ40cmである。土師器片が少量出土した。

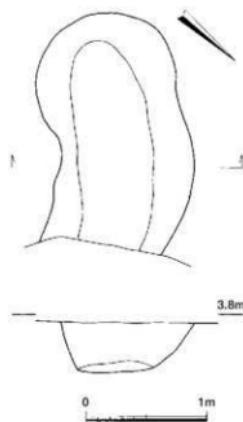


Fig.27 SK 14実測図 (1/40)

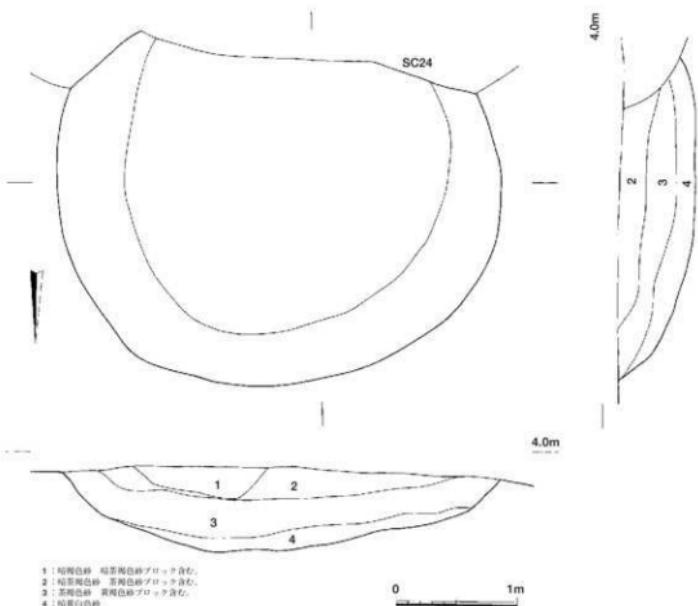


Fig.28 SK 25 実測図 (1/40)



Ph.30 SK 25 (南東から)

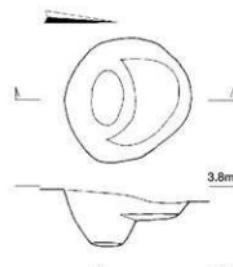


Fig.29 SK 26 実測図  
(1/40)

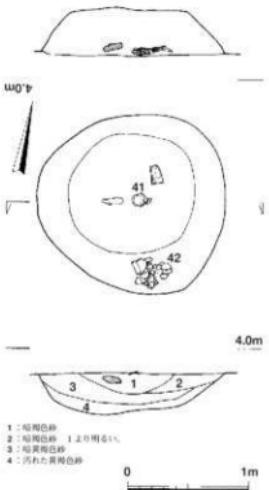


Fig.30 SK 2 7 実測図 (1/40)

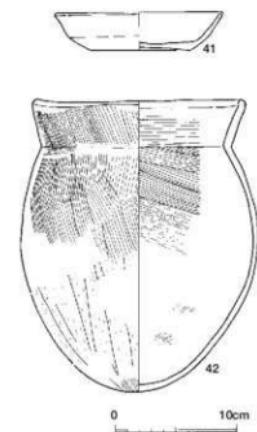


Fig.31 SK 2 7出土遺物実測図 (1/4)



Ph.31 SK 2 7出土遺物 (約1/4)



Ph.32 SK 2 7 (西から)



Ph.33 SK 2 7・28・29 (北から)

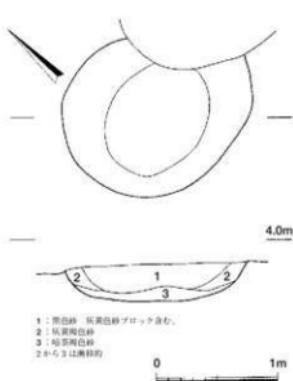


Fig.32 SK 2 8 実測図 (1/40)

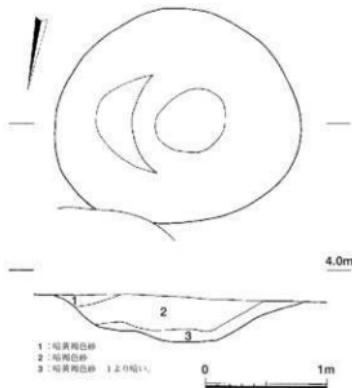


Fig.33 SK 2 9 実測図 (1/40)

SK 3 4 (Fig.34)

B区で調査をおこなった。A・B-12・13に位置する土坑である。西側は調査区外にのび、北側はSD 2 3に切られ、東側はSC 2 4に切られる。残存規模は東西2.0m、南北2.1m、深さ20cmである。深さ20cmのビットが2ヶ所あるが、土坑に伴うものか不明。土師器小片が1点出土したのみである。

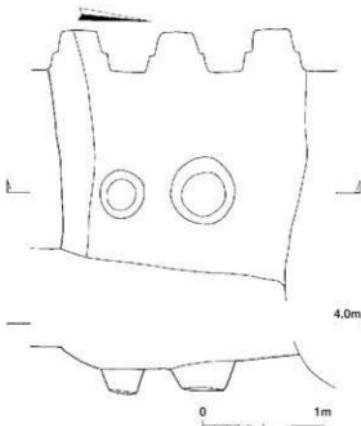


Fig.34 SK 3 4 実測図 (1/40)

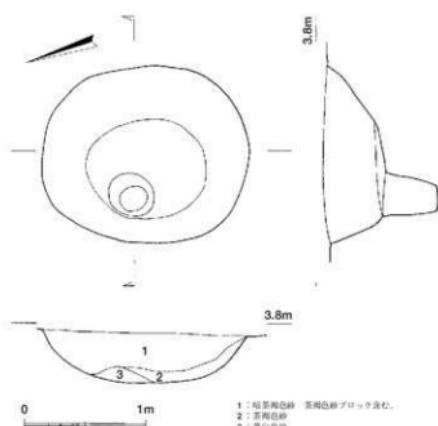


Fig.35 SK 3 6 実測図 (1/40)

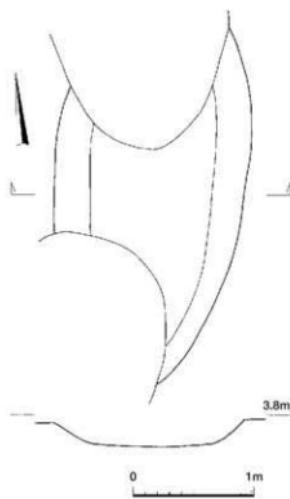


Fig.36 SK 3 7 実測図 (1/40)



Ph.34 SK 3 6・3 7 (西から)

### SK 3 6 (Fig.35、Ph.34)

C区で調査をおこなった。E・F-7・8に位置する土坑である。SK 3 7を切る。東西1.4m、南北1.7mの楕円形で深さは50cm。底面西寄りに深さ50cmのビットがあるが、土坑に伴うものか不明。土師器片が少量出土した。

### SK 3 7 (Fig.36、Ph.34)

C区で調査をおこなった。F-6～8に位置する土坑である。SK 0 8、SK 3 6に切られる。東西1.6m、南北残存長3.0m、深さ20cm。遺物は出土しなかった。

### SK 3 8 (Fig.37、Ph.35)

C区で調査をおこなった。G-9～10に位置する東西0.5～0.6m、南北1.9mの細長い土坑である。深さは15cm。SK 3 9を切る。遺物は出土しなかった。

### SK 3 9 (Fig.37、Ph.35)

C区で調査をおこなった。G-7～9に位置する土坑である。SK 4 0を切り、SK 3 8に切られる。東西1.7m、南北3.9m、深さ30cm。中央に深さ20cmのビットがあるが、土坑に伴うものか不明。遺物は出土しなかった。

### SK 4 0 (Fig.37、Ph.35)

C区で調査をおこなった。G・H-8に位置する土坑である。径1.6mの円形であると思われるが西半をSK 3 9に切られている。深さは10cm。遺物は出土しなかった。

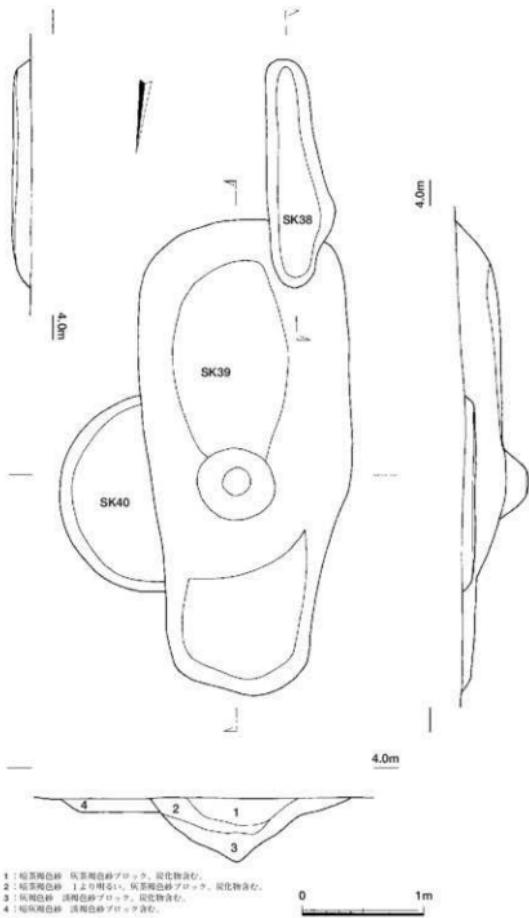
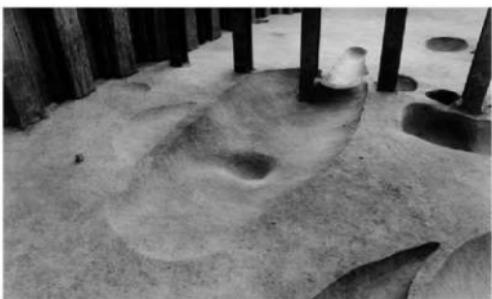


Fig.37 SK 3 8・3 9・4 0 実測図 (1/40)



Ph.35 SK 3 8・3 9・4 0 (西から)

喪棺

S T 1 5 (Fig.38・39、Ph.36・37)

A区で調査した。D-2・3に位置する。S C 0 1掘り下げ時に発見した。上棺に広口壺、下棺に甕を利用した小児棺である。主軸はN-125°-Wをとり、埋置角は8°である。上棺を下棺に挿入し

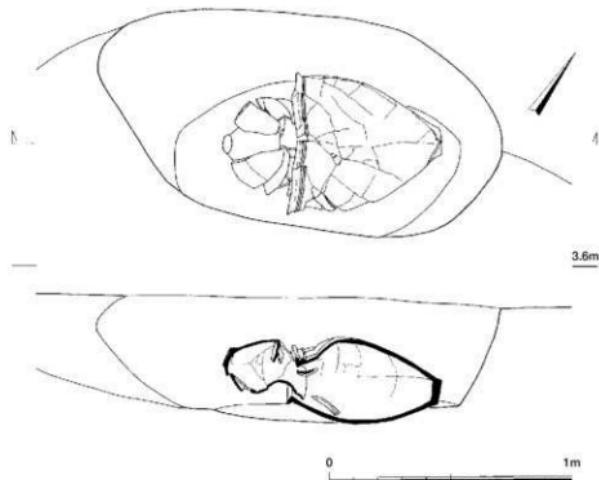
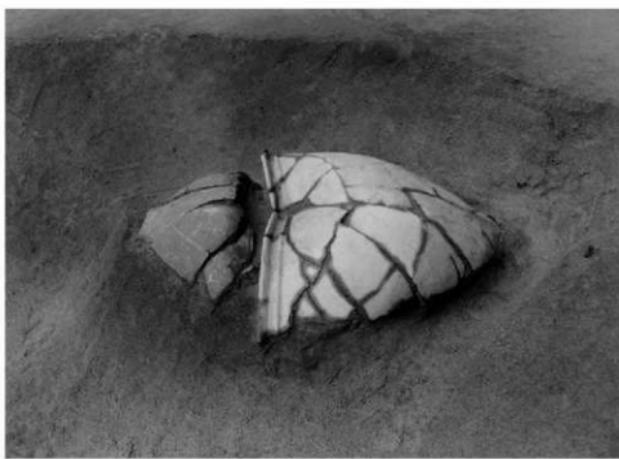
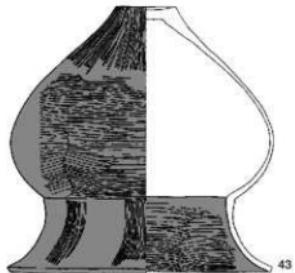


Fig.38 S T 1 5 実測図 (1/20)



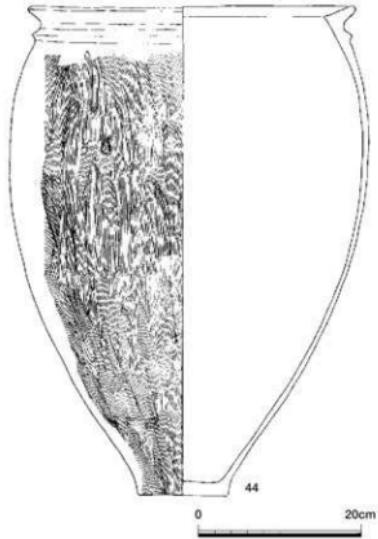
Ph.36 S T 1 5 (南東から)



43



43



44



44

Fig.39 S T 1 5 施棺実測図 (1/6)

Ph.37 S T 1 5 施棺 (約1/6)

ているが、上棺の口径の方が大きいので上棺の口縁の一部を打ち欠いている。割れているが、遺存状況は良好である。

43は上棺として用いられた丹塗研磨の広口壺である。口縁部外面はヨコナデの後、縦方向に約4cmの幅で8ヶ所暗文を施す。胴部は横方向のヘラミガキ、胴部下部は縦方向のヘラミガキを密に施す。肩部では1周6単位で磨いている。口縁部内面は横方向のヘラミガキを1周7単位でおこなう。口径32.5cm、器高32.9cm、底径7.4cm。外底を除く外面と口縁内面に朱塗り。胎土は精良で焼成良好。ほぼ完形である。44は下棺で用いられた甕である「く」の字状の口縁で、口縁部直下に三角突帯を有す。

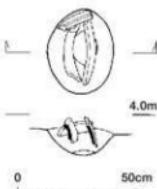


Fig.40 S X 3 3 実測図 (1/20)



Ph.38 S X 3 3 (北から)



Fig.41 S X 3 3 出土遺物実測図 (1/6)

口縁部ヨコナデ、胴部はタテハケを密におこなう。口径40.2cm、器高60.0cm、底径12.0cm。浅黄色を呈し、胴部に黒半がある。胎土に径1mm程度の砂粒を少量含む。焼成は良好。ほぼ完形である。SK 0 4 から1片出土しており、SC 0 1を構築した際に遊離したものがSK 0 4に入り込んだのであろうか。弥生時代中期後半の甕棺墓である。

#### その他の遺構

##### S X 3 3 (Fig.40・41, Ph.38)

B区で調査した。D-10に位置する。遺構確認をおこなっていると甕が露出した。口縁部と胴部破片を利用して、銳角の二等片三角形を組む。

45が据えられていた備前焼大甕の口縁部である。間壁編年IV B期、15世紀後半以降のものである。口縁～肩部の4分の1の残存で、復元口径は50.0cmである。

#### (2) 下層遺構の調査

##### 溝

##### S D 1 7 ~ 2 1 • 3 2 (Fig.42, Ph.39・40)

A区の調査時、SC 0 1の西壁に遺構面から見えないやや汚れた落ち込みを発見した。そのため、全体をきれいな黄褐色砂になるまで20cmほど掘り下げた。するとA-D-3~8の範囲に幾条かの細い溝が検出された。SK 1 3の底面で見られた細い溝もこの溝群と一連のものであった。遺物は出土せず、遺構の時期、性格とも不明である。

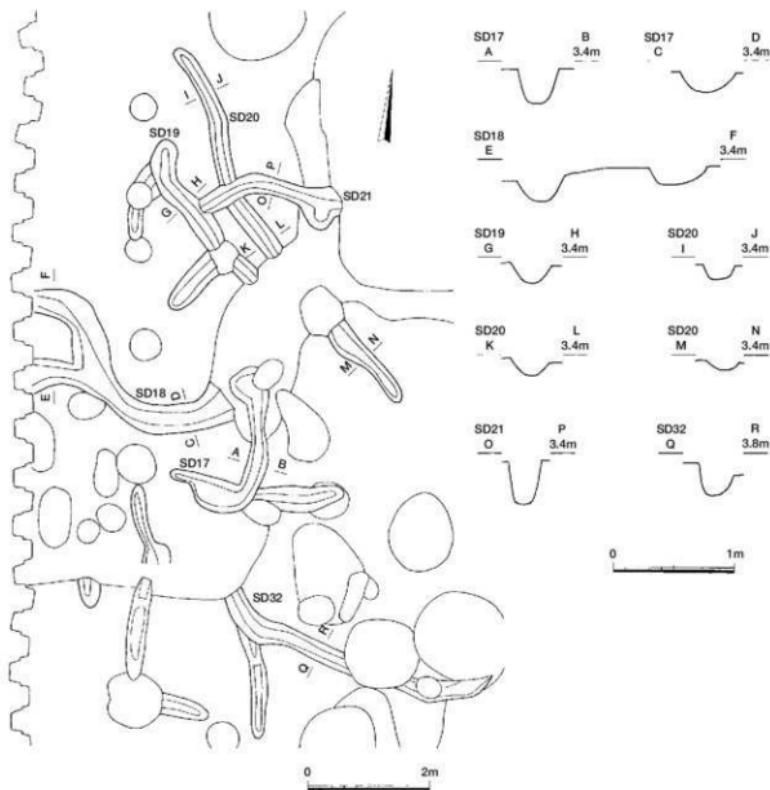


Fig.42 SD 17 ~ 21 + 32 実測図 (1/80・1/40)



Ph.39 下層遺構群 (南東から)



Ph.40 下層遺構群 (東から)

### (3) 繩文時代包含層の調査 (Fig.43~46, Ph.41~43)

B区とC区の南部、12列以南に分布する。すでに述べたように古墳時代竪穴住居の床面下で包含層を確認した。粘性が少しある赤褐色を呈する砂層に遺物が含まれていた。この層は12列辺りでなくなる。九州大学の下山正一先生の予備的な分析ではアカホヤ火山灰を含んでいるとのことである。それより下層は非常に堅い暗赤褐色の粘土層となり、この層は12層辺りで急激に落ち込んでいく。

遺物はA区ではそのまま取り上げたが、C区では出土位置を記録して取り上げた。土器約300点、石器6点、黒曜石片60点が出土している。数はC区よりB区の方が、倍近く出土している。ただし、西隣21次調査でも繩文時代遺物が出土したが、点数は多くなかったようで、あまり分布は広がらないようである。土器は繩文時代前期森B式・曾畠式系があり、それと判断できるものはそれぞれ、9%、4%程度で大部分は無文のものである。7割程度は器面の条痕をなで消しており、残っているものも、なでが不十分で残ったものが多い。

出土した遺物をFig.45・46に示す。土器は文様のあるものを中心に、無文の土器は形状のわかるものを図示した。

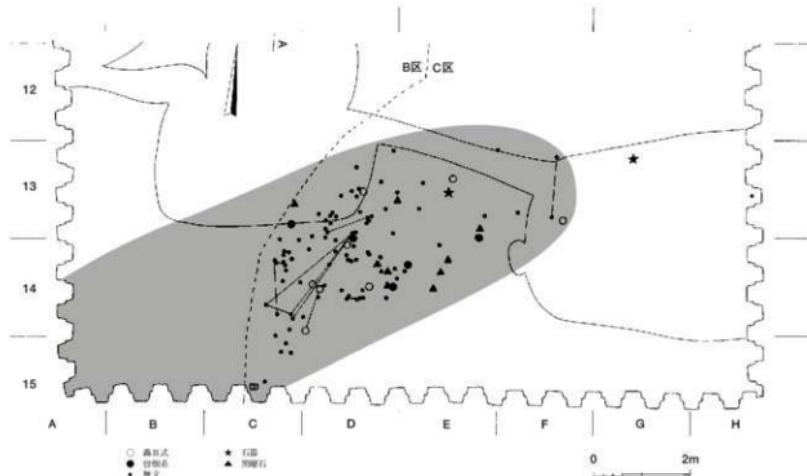


Fig.43 繩文時代遺物出土分布図 (1/100)

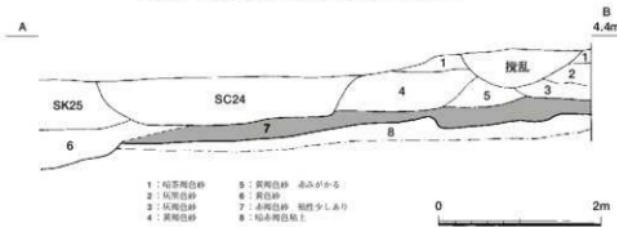


Fig.44 繩文時代包含層土壌断面図 (1/60)



Ph.41 C区縄文時代遺物出土状況（南から）



Ph.42 C区縄文時代遺物出土状況（東から）

46～72は口縁下に微隆起線文を数条めぐらす轟B式の土器である。色調や焼成具合からこれらの土器の下半部と思われる破片も多数あるが接合できていない。

73～80は沈線文や刺突文を施す曾畠系の土器。いずれにも胎土に滑石は含まない。

81～88は無文のもの。81は口縁部片で、調査時の傷があるが、焼成前に付いた痕跡もある。82も口縁部片で、内面に条痕がある。87は底部の破片。復元すると底径5.0cmで小型のものである。88は底部で、若干丸みを帯びた平底を呈する。内外面に条痕を残す。

89～94は石器である。89は石鎌である。乳白色の黒曜石を素材とする。90は縦長のスクレイバーでサスカイト製である。91は横長のスクレイバーである。サスカイトを素材とする。92は磨石である。

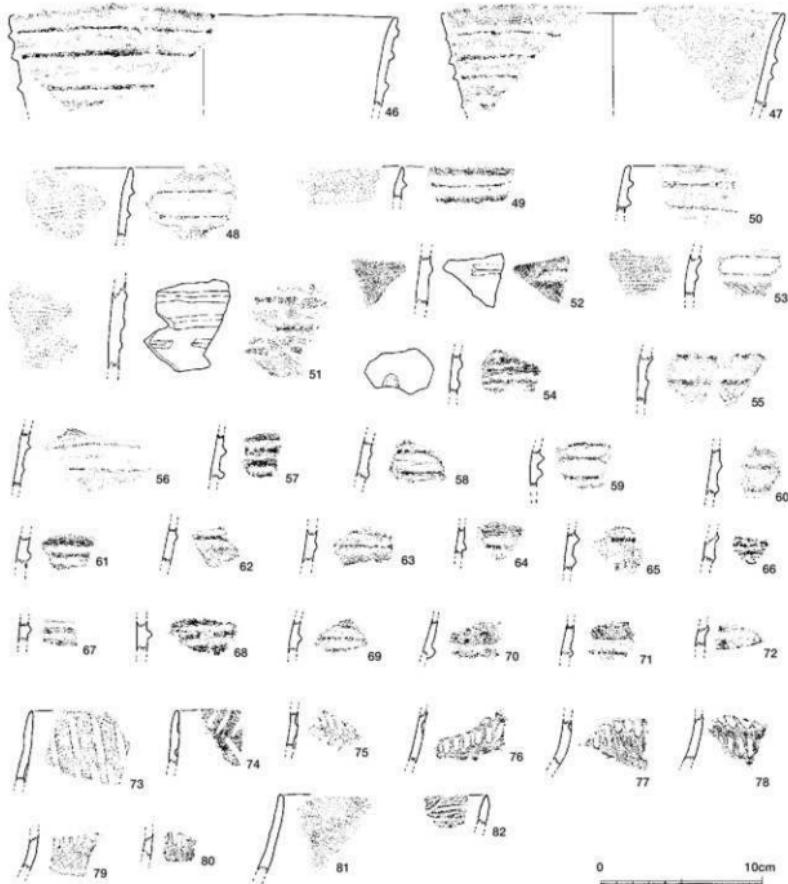


Fig.45 縄文時代遺物実測図（1）(1/3)

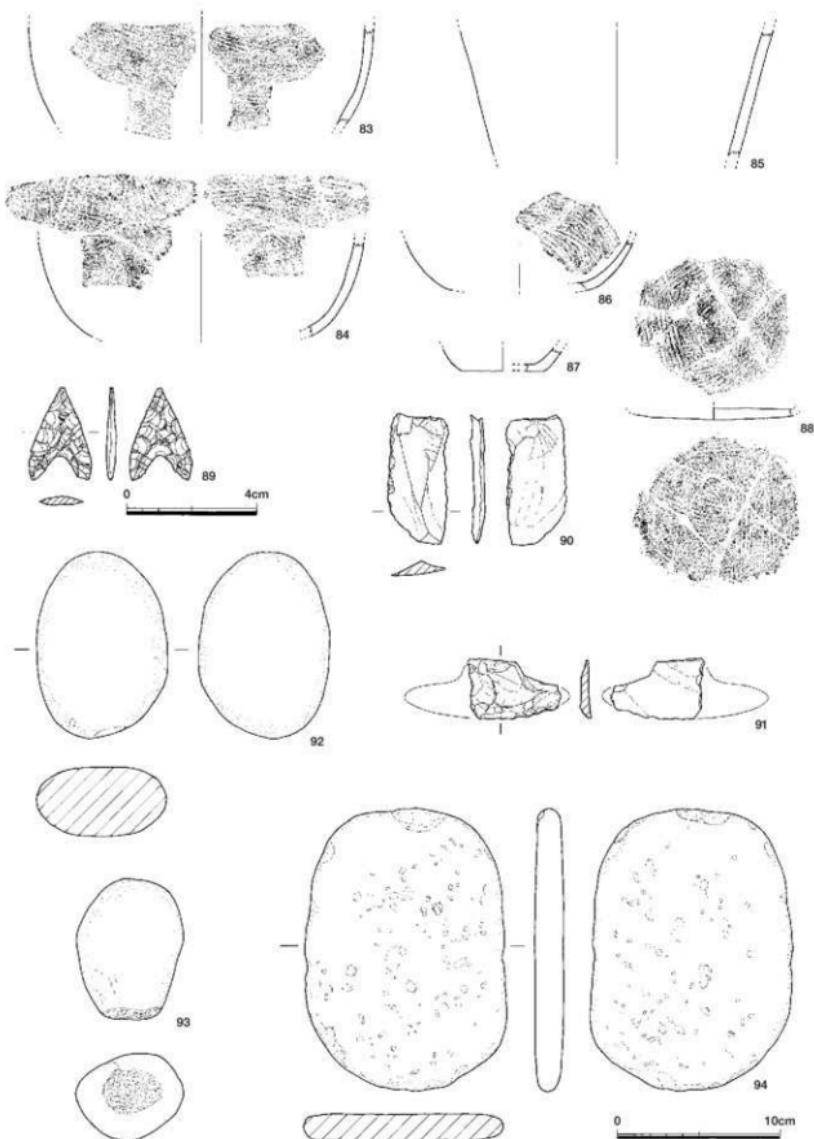
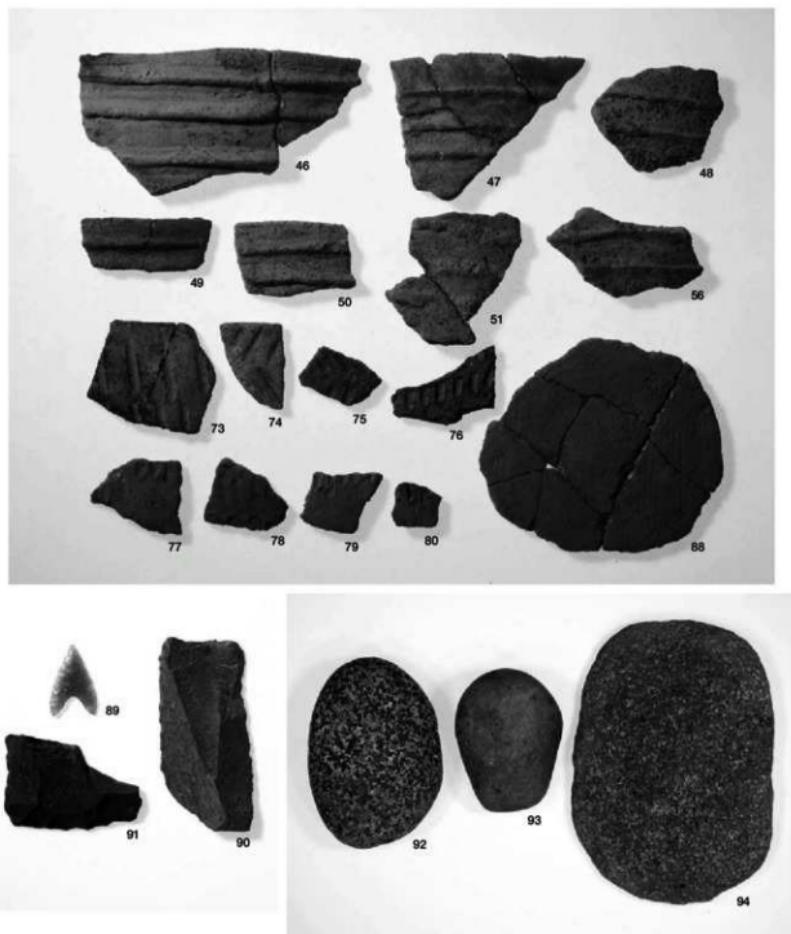


Fig.46 縄文時代遺物実測図（2）(89:2/3・他:1/3)

る。花崗閃綠岩製である。93は敲石。砂岩成製である。94は小型の石皿か。結晶片岩製である。

このほか、黒曜石片が60点出土している。国立沼津工業高等専門学校・常葉学園大学の高橋豊氏にエネルギー分散型蛍光X線装置による产地推定をおこなっていただいたところ、89の石鎌は姫島産、微細な碎片1点が淀姫、そのほかは腰岳という結果が出た。詳細は追って報告する予定である。



Ph.43 縄文時代の遺物 (46~91: 約1/2・92~94: 約1/3)

### III まとめ

今回の調査では、縄文時代前期から今回報告できなかった近世までの7時期の遺構・遺物を確認した。以下時期を追って概略をまとめておく。

**縄文時代前期** 西新町遺跡としては初めてまとめた量の縄文時代遺物が確認された。前期とされる藤B式、曾畠式の時代である。これまで12次調査で西北九州型石鋸先や使用痕ある黒曜石製剥片、14次調査で曾畠式土器が報告されていたのみであった。今回は複数個体の土器と、黒曜石剥片が確認されており、一定期間の滞在が想定される。分布は調査区南西に偏っていたが、西隣21次調査では少量しか縄文時代遺物は出土せず、南側にどれだけ広がるかが今後の課題である。同時期の市内西南部の遺跡は早良平野奥部から山地では椎原A、内野、中山、脇山A、栗尾B、大坪南、平野部では四箇、田村遺跡が調査されている。また、海岸近くの今山遺跡でも近年発見された。砂丘に面した丘陵端部に立地しており、地形的に類似し、当時の生業や地形変化などを考える上で貴重な資料となる。

**弥生時代中期** 中期後半の小児棺が1基確認された。西新町遺跡の甕棺墓群は2次、10次、7次と北西から南東へ帶状に分布するが、今回の調査では調査区北部に1基検出されたのみであり、甕棺群の南東端をとらえたと思われる。

**弥生時代終末～古墳時代前期** 竪穴住居3軒と土坑などが検出された。ほとんどの遺構がこの時期に属すると思われる。出土した土器はこの時期の特徴である在来系、畿内系、山陰系がみられる。同時期の修猷館高校内の調査区の土器と比べると出土量が少なく、在来系の占める割合が高いという特徴がみられる。また、朝鮮半島系の土器は出土しなかった。漁撈関連の遺物（石錘・イイダコ壺）が出土していない。久住猛雄氏の編年（注）によるとSK04がⅠB期、SC01・SK12がⅡA期、SC24・42がⅡB期との教示を得た。

**古墳時代後期** 土坑を1基確認した。西新町遺跡では遺構が非常に少ない時期で、9次調査で木棺墓1基、土坑2基が検出されたのみである。

**古代** 東西方向の溝を1条確認した。西側6・8・9次調査で確認されている溝と同一のものかもしれない。とすれば150mが確認したことになる。何らかの広範囲の区画溝が存在したのであろう。そのほか古代の遺構は西新町遺跡ではほとんど見られず、この溝がどういう性格なのか検討が必要である。

**中世** 今回の調査では糸切り底の土師器壺が出土した土坑と備前焼甕の口縁部を据えた性格不明の遺構がある。中世の遺構も西新町遺跡では非常にまれであり、2次・3次調査で木棺墓、11次調査で溝1条があるのみである。海に面した砂丘上には元寇防塁が築かれた時期であるが、ほとんど生活痕跡が見られない地域となる。その後、近世までは黄白色のきれいな砂が厚く堆積しており、生活痕跡が見られなかった。急速に砂丘が発達したのであろう。

**近世** 今回報告しなかったが、近世の土坑、井戸が各1基検出され、陶磁器類が出土している。また、重機による掘り下げ時に陶磁器や窯道具が出土している。18世紀初頭より南側の丘陵部に筑前高取焼の窯が操業しており、関連遺物の一部であろう。

(注) 久住猛雄 1999 「北部九州における庄内式併行期の土器様相」『庄内式土器研究』XII

## 報告書抄録

ふりがな	にしじんまちいせき 9
書名	西新町遺跡 9
副書名	第18次調査報告
卷次	
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	939
編著者名	田上勇一郎
編集機関	福岡市教育委員会
所在地	〒810-8621 福岡県福岡市中央区天神1丁目8-1 TEL 092-711-4667
発行年月日	西暦2007年3月30日

ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 (世界測地系)	東経 33° 130° 34' 21' 55" 21"	調査期間 20050921 ~ 20051209	調査面積 m <sup>2</sup> 348	調査原因 共同住宅建設
		市町村	遺跡番号					
にしじんまちいせき 西新町遺跡	ふくおかんふくおかし 福岡県福岡市 さわらくにしじん 5ちょうめ 早良区西新 5丁目 572ばんほか 572番外	40130	0240					

所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項
西新町遺跡	散布地	縄文		縄文土器 石器		
	墓地	弥生	甕棺墓 1	甕棺		
	集落		土坑 1	弥生土器		
	集落	古墳	竪穴住居 3	土師器		
			土坑 14	須恵器		
	集落	古代	ピット 多数			
	集落	中世	溝 1	須恵器		
			土坑 1	土師器		
			その他 1	備前焼		
	不明		溝 6			
			土坑 6			
			ピット 多数			

## 西新町遺跡 9

—第18次調査の報告—  
福岡市埋蔵文化財調査報告書第939集

2007年3月30日

発行 福岡市教育委員会  
福岡市中央区天神1-8-1

印刷 正光印刷株式会社  
福岡市西区周船寺3-28-1

# NISHIJINMACHI SITE 9

— Results of the 18th excavation of Nishijinmachi site —

Report of Archaeological Investigations of Fukuoka city, Vol.939



2007

THE BOARD OF EDUCATION OF FUKUOKA CITY